



—誰でも読めるシリーズ—



『クリトン』



プラトン

大庭好喜

まえがき

現在、あふれかえるほどの本が出版されています。ドキュメンタリー・小説・随筆・伝記などジャンルはさまざまです。また、日本人が出版したもの、外国人がその母国語で出版したもの、また、つい最近刊行されたもの、書かれて1千年以上が経過するものなどいろいろです。

ところで、芥川賞・直木賞などを受賞した作品には、何百万部も売れ、ベストセラーにもなるものもあります。現代の日本のこれらの作品を読み感動することはすばらしいことだと思います。一方、長い時代をとおして人々に読まれ続けてきた「世界の名著」と呼ばれるものを手に取り読むこともまた大事なことだと思います。「世界の名著」といえば、学生時代に世界史や倫理の授業で著者と作品名を覚えたことを思い出す人もいらっしゃるでしょう。例えば、ダンテの『神曲』、ボッカチオの『デカメロン』やギリシャ思想のところでは、プラトンの『ソクラテスの弁明』や『饗宴』などがそうです。しかし、これらの本を実際に読んだことのある人はどれぐらいいらっしゃるでしょうか。今でも著者とタイトルは覚えているが、その内容は全然分からないという人がほとんどではないでしょうか。無理もないことだと思います。仮に書店の訳本コーナーでそれを見つけて、ページをめくってみても、その内容が分かりにくく面白く読み進んでいけないからです。翻訳者が原文に忠実に翻訳しようとして、訳本の内容をかえって複雑にしまったり、専門的訳語を使うことにこだわったりするために、一般の読者が読むにはあまりにも難解な訳本に仕上がってしまっているからです。語学に習熟して原文を直接読める人は、原文では理解できるのに訳本となるとかえって分かりづらくなるという話を聞いたことがあります。

そこで私は、著者の本の内容をできる限り変えずかつ大胆に、われわれが通常耳にする日本語を使い、簡単に読める内容に改めました。完訳本を読んだと同じぐらいの理解と満足感を短時間で得られるように努めました。通勤・通学の電車の中でも気楽に読め、頭に入るものをめざして書きあげました。まずは、読むことによって、過去の偉大な思想家の著書に直接ふれてそのすばらしさを味わっていただきたいと思います。－誰でも読めるシリーズ－として順次刊行していきますので、どうぞ手に取ってお楽しみいただければ幸いです。

ソクラテス：

「今日はやけに早いな」

クリトン：

「確かに。まだ夜明け前だからな」

ソクラテス：

「それにしてもよくここに入れたな」

クリトン：

「簡単だよ。牢屋の番人になにかと付け届けをしているからな」

ソクラテス：

「ところで今来たのかい、それともだいぶ前に来ていたのか」

クリトン：

「かなり前に来ていたよ」

ソクラテス：

「それならなぜすぐ、私を起こさなかったのかい」

クリトン：

「いや、君が死刑判決を受けてなかなか眠れないのではないかと思ったからだよ。もし、やっと眠りにつけたところだとしたら、起こすのは申し訳ないと思ったからさ。それにしても君は、いつものように熟睡しているように見えたけどそうなのか。私だったら、とてもそのように平静ではいられないと思うよ」

ソクラテス：

「この年になって死期が近づいたからといってもがくのはばかげた話だよ」

クリトン：

「君と同じぐらいの年の老人でも、死すべき運命に出会って、もがき苦しむ人を何人も見てきたよ」

ソクラテス：

「それはそうとして、何の用事でこんなに朝早く来たのかい」

クリトン：

「実は悲しい知らせを持ってきたんだ。まあ君にとっては何でもないかもしれないのだが、我々にとっては、ひじょうに悲しいものなのだ」

ソクラテス：

「ひょっとして、死刑執行の期日が決まったのか」

クリトン：

「そうなんだ。どうも明日、君の死刑が執行されることになるらしいのだ」

ソクラテス：

「いや違うよ、クリトン。ぼくの死刑の執行は明日ではないと思うよ」

クリトン：

「なぜそう思うんだい」

ソクラテス：

「実はさっきまでぼくは夢を見ていたんだ」

クリトン：

「その夢の話を詳しく聞かせてくれよ」

ソクラテス：

「今から3日後にソクラテスは幸せの場所に行くのだと、女性から告げられた夢だったんだよ」

クリトン：

「不思議な夢だね」

ソクラテス：

「まあ、ぼくにはその夢の意味は、よく分かっているんだけどな」

クリトン：

「それはそうとして、ソクラテス、今からぼくの言うことをどうかよく聞きいれてくれ。とにかくここから逃げ出してくれ。親友である君を失いたくないんだ。それとぼくが金を惜しんでソクラテスを逃がさなかったと後々人々に、非難されたくはないんだ。ぼくは君に何度も逃げてくれと頼んだが、ソクラテスは決して逃げようとはしなかったと言っても、誰も信じてくれるはずがないからな」

ソクラテス：

「なぜそんなことを気にするんだい。賢い人はちゃんと真実を見ているよ」

クリトン：

「多くの人の意見を考慮しなければならないことは、今度の一件で君にも分かったはずだよ。大衆を敵に回すとどんなささいなことでも大きな害を被るからだよ」

ソクラテス：

「ぼくは逆に大衆にそれだけの大きな力があればいいと思うよ。それなら人を幸福にすることもできるからだ。しかし、現実には大衆にそのような力はないのだよ」

クリトン：

「それはそれとして、ソクラテス、君はまさかぼくらが君を逃がしたあとの財産没収やその他の罰を我々が受けることを心配しているのではないのかい。われわれは、たとえそれ以上の犠牲を払ってもかまわない覚悟だよ。どうかぼくの言うことを聞いて逃げてくれ」

ソクラテス：

「確かに、君たちが罰を受けるかもしれないということは、ぼくの心配の一つであることは間違いない」

クリトン：

「どうかそんな心配はしないでくれ。彼らが要求する金額などたかがしれているし、君のためなら仮にぼくの財産のすべてを使ってもかまわないよ。また、ソクラテスのために使ってくれと言ってわざわざお金を持ってやってくる人もいるくらいだ。だから何も気にすることなく逃げてくれ。君ならどこへ行っても歓迎されるはずだよ。生きのびようと思えばいくらでも生きながらえる方法はあるのに、あえて自ら死を選択しようとすることには、ぼくは賛成できないんだ。奴らのわなにまんまとはまるのかい。残された息子たちはどうなるのかい。息子たちを見捨てるのか。君には子供たちを扶養する義務があるのではないか。そもそもこの裁判から一連の判決までを防げなかったのは自分たちの力のなさだし、もし君を今ここから助け出せなかったら、われわれはさらに卑劣なやからだと世間から思われることになる。ソクラテス、ここを出ることがあなたも含めすべての人にとっていいことなんだ。考えている暇はない。今晚中にここを出なければならないのだ。ぐずぐずしていたらすべてが無駄になってしまうのだ」

ソクラテス：

「クリトン、君の熱心さには感謝するよ。しかし、私は今まで心の中から発する正しいことのみしか行ってこなかった。これから先も今以上のどんな脅かしにあおうとも私はこの声に従っていく。大衆の多くの意見が尊重され、正しくても少数の意見が尊重されないというのは正しくないよな」

クリトン：

「正しくない」

ソクラテス：

「知者の意見に従うべきで、知者でない者の意見には従うべきではないな」

クリトン：

「そのとおりだ」

ソクラテス：

「運動選手は、多くの人の意見を聞くだろうか、それとも一部の専門家の意見を聞くだろうか」

クリトン：

「もちろん専門家だ」

ソクラテス：

「つまり人間が大事にすべきなのは、大衆の意見ではなく、ただ一人の専門家の意見だな」

クリトン：

「そのとおりだ」

ソクラテス：

「ところがある人が逆に大衆の意見を重要視したらそれは、災いをもたらすよな」

クリトン：

「そのとおりだ」

ソクラテス：

「では、その災いとはどんなものなのか」

クリトン：

「身体にもたらされる害悪だ」

ソクラテス：

「このことはどんなことにもあてはまるのではないのかい」

クリトン：

「そのように思える」

ソクラテス：

「専門家の意見を聞かないがために損なわれたものがあるとしたら、それは身体かい」

クリトン：

「そうだ」

ソクラテス：

「不健康な身体で生きがいなどあるかい」

クリトン：

「ないと思う」

ソクラテス：

「知者である専門家は言う。大事なものは、単に生きることではなく、善く生きることだと」

クリトン：

「そのとおりだ」

ソクラテス：

「そして善く生きることとは、正しく生きることだよな」

クリトン：

「そのとおりだ」

ソクラテス：

「それじゃあ今までの議論の結論から次のことを考えてみよう。僕がアテネの人々の同意なしにここから逃げることは正しいことだろうか。もし正しいことなら私はそれを行う。君が考慮すべきだという、費用や子供のことなどそれらも気にはかかるが私にとっては大きな問題ではない。果たして金銭を払って私を連れ出すことが正しいことなのか。ここにいると殺されることになるが、それは不正を犯すことに比べればまだましなことだ」

クリトン：

「君の言うことは確かに正しい。それなら、私はどのようにすればいいのか教えてくれ」

ソクラテス：

「まず、ぼくに反論できることがあればどうぞしてくれ。その反論にぼくが納得できたならばそれに従うよ。そうでなければ、もう逃げろなどということは言わないでくれ。ぼくは、できることなら君の同意を得たうえで行動したいんだ。クリトン、ぼくらはいかなる時でも不正を行ってはならないと結論したよな」

クリトン：

「そのとおりだ」

ソクラテス：

「不正を不正でもって返すことは許されないことだよな」

クリトン：

「そのとおりだ」

ソクラテス：

「さらに聞くよ。人は誰か他者に災いをもたらしてもよいのか」

クリトン：

「いや悪い」

ソクラテス：

「人から加害を被ったことに対し加害で答えることは正しいか」

クリトン：

「いや、正しくない」

ソクラテス：

「人に害を加えることというのは、不正を行うということだよな」

クリトン：

「そのとおりだ」

ソクラテス：

「たとえ自分がどんな災難を人から受けさせられようと、この原則は変わらないし今も変わっていないのだ」

クリトン：

「ぼくも変わってはいない」

ソクラテス：

「また、人は他者に対して約束したことは、尊重すべきかそうでないか」

クリトン：

「当然、尊重すべきだ」

ソクラテス：

「それなら私が国家の同意を得ずにここから逃げ出すことは、何者にも災いを与えずかつ正しいことなのか」

クリトン：

「その答えは、ぼくには分からないから、答えることはできない」

ソクラテス：

「ここから逃亡しようとしたら、国家と国法がやってきて、「お前は今国家と国法を破壊しようとしているのではないか」と言うだろう。「国家に暮らす個人が国法を破って、その国家は存立していると言えるのか」と。それとも国家がそういうことを言うことが誤っているとでもいうのかい」

クリトン：

「私は国家が誤っていると思う。国家が間違った判決を下したのだ」

ソクラテス：

「それなら国法はどのように言うだろう。「お前は国家の法に従うと誓ったのではないか。いったいお前は我々の何に対して文句を言っているのだ。まず第一に、お前が生まれ、今まで生きてこられたのは国家のおかげではないのか。国家があったからこそお前の父と母は出会い、安心してお前を育てることができたのではないか。わが国の婚姻に関する法律で、お前が欠点として非難できるものがあるのか。子供の教育に関するもので、何か不満なものでもあったか。お前は、どれだけの恩をうけてきたと思うのか。お前は、父親や主人と同等の権利を持っているとでも思うのか。国法に対してもお前のあり方はそれと変わりないはずではないか。いや、国とは父・母よりもっと偉く、尊ぶべきものではないのか。国家とはそういうものではないのか。いついかなる時でも、国民は国家の命令に従わなければならない。父母に暴力を用いることが罪悪なら、国家・国法に対してはなおさらのことではないか。そんなこともソクラテスは分からないのか」このように言ってきたら君はそのとおりだというのか、それともそれは間違っているとでもいうのか。」

クリトン：

「国法のいうとおりだと思う」

ソクラテス：

「国法は続けて言うだろう。「今おまえが逃げようとするなら、それは間違いである。私は、お前に扶養・教育やあらゆる良いものを与えてきた。それにもかかわらず、望むならいつでもお前は全財産をかかえてこの国を去ってもよいとまで言ってきたのではないか。おまえは、ここに住むなら国家に服従する義務があるし、もしそれがいやなら私を説得して改めさせるべきではないか。我々は、それをお前に許している。お前が逃げるという企てを実行するなら、その非難は

お前に向けられる。なぜならこの約束をした者こそソクラテスお前自身だからだ。お前はこの国が気に入っていたはずだ。第一お前は、この国を用事もなく離れたことがない。おまえがここに住み、ここで子供をもうけたことも、ここが気に入っていたからではないのか。さらに、お前は裁判の途中で追放の刑罰を受け入れることもできたはずだ。ところが高慢にもどんな刑にももがきはしないと述べ、自ら死刑を選んだようなものではないか。それなのに今となって、私にそむいて逃亡を企てようとしている。恥をさらすことだとは思わないのか」このように国法

が言ってきたらクリトン、おまえはどのように答えるのか」

クリトン：

「たしかに国法の言うとおりでと答えざるをえない」

ソクラテス：

「さらに国法は私に言う。「お前は我々との契約を無視しようとしているのではないか。お前が私のもとを立ち去ろうと思えば、いつでもできたはずだ。70年間もの余裕があったではないか。それどころか、お前はこの地を離れるのはまれであった。お前は国法が好きなのだ。まさか死から逃れたいだけの理由でここから逃げて物笑いの種となるようなことはないよな。お前が逃亡したり、この決定に従わなければ、どのような結果がお前たちにふりかかってくるのか分かっているのか。お前はもちろんのこと、家族や友人もすべて追放の刑に処せられたり、財産を没収されたりするのだぞ。お前が今から他の国に逃げても、そこでお前はその国の国法の敵以外の何者でもない。お前はそこでは、国法の破壊者と呼ばれる。またお前に対するこの判決も、やはり正しかったものとみなされるようになる。そんな状況でその場所でお前は正義を人々に語ることができるとでも言うのか。まあ、無秩序な国では、逃亡者として暖かく迎えられるかも知れないがな。それも滑稽な話だ。どうしてあと少しの寿命のお前が恥をかいえてまで生き続けようとするのか。そこでお前は奴隷のように他人にこびへつらって生きるのか。お前は子供を養ってやりたいのだろう。しかし、そのような状態のお前に連れ添っていけるのか。たとえお前がいなくても子供たちはお前の友人が養っていくであろう。だからソクラテス、正義以外のことは気にするな。お前がこのままこの世を去るなら、一般大衆から不正を受けた人間として認められるであろうが、もし逃げたなら国法に不当な仕返しをした人間としてどこへ行っても、また死んだ先でも汚名を着せられ続けるであろう。お前は私に従うのが一番いいのだ」クリトンよ。私にはこういう声がたえず聞こえるのだ。それでも君はまだ私に何か言おうとするのかい」

クリトン：

「いや、もう何も言うことはないよ」

ソクラテス：

「じゃあ、ぼくは自分の考えとおりに行動するよ」